



なごや生物多様性センターの池干しへの関わり方 ～ 過去14年を振り返って～

名古屋市環境局 なごや生物多様性センター 加藤航大

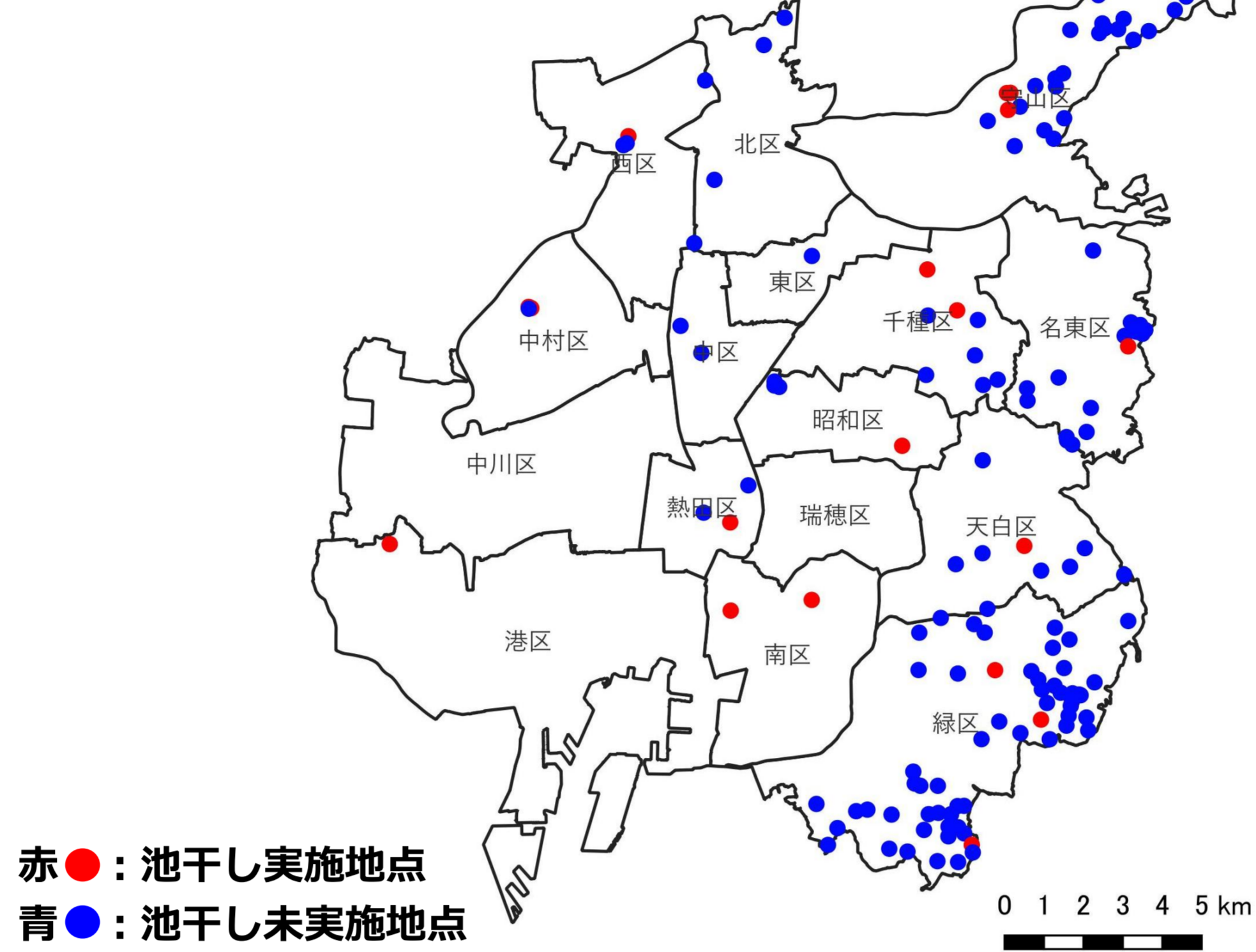
はじめに

なごや生物多様性センター（以下、センター）は2011年の設立以来、「なごや生物多様性保全活動協議会（通称、なごビオ）」と協働で「池干し」を実施している。池干しは従来、農業用のため池などで農閑期に水位を下げて清掃や補修などを行う目的で実施されていたが、農業利用が減少した昨今では生物多様性を維持する手法として注目されている。センターとなごビオは、**14年間で19件の池干しを実施**してきた。本発表では、14年間の活動をまとめて紹介する。

名古屋市のため池の現状

- ◆ 名古屋市には東部の丘陵地域を中心に**300**を超えるため池が存在していたが、埋め立てにより2014年には**111**まで減少した。
- ◆ 流入量の減少、水質悪化、エコトーン
の消失、護岸や堤体の改修工事、外来種
の放流などの問題を抱えている。

名古屋市のため池・調整池



隼人池公園 隼人池（昭和区）



猪高緑地 塚ノ杵池（名東区）



鶴舞公園 胡蝶ヶ池（昭和区）



平野池（緑区）

池干しの変遷

2011～2015年度

- なごビオが企画したり、地域と協力して**イベント的**に実施
- 地元住民や児童に対して参加募集し、池干し全体の参加者は**数百人規模**
- 池の調査に加え、オオクチバスなどの**外来種防除が主な目的**であったが、池の水を抜き切ることはなかったため**効果は限定的**



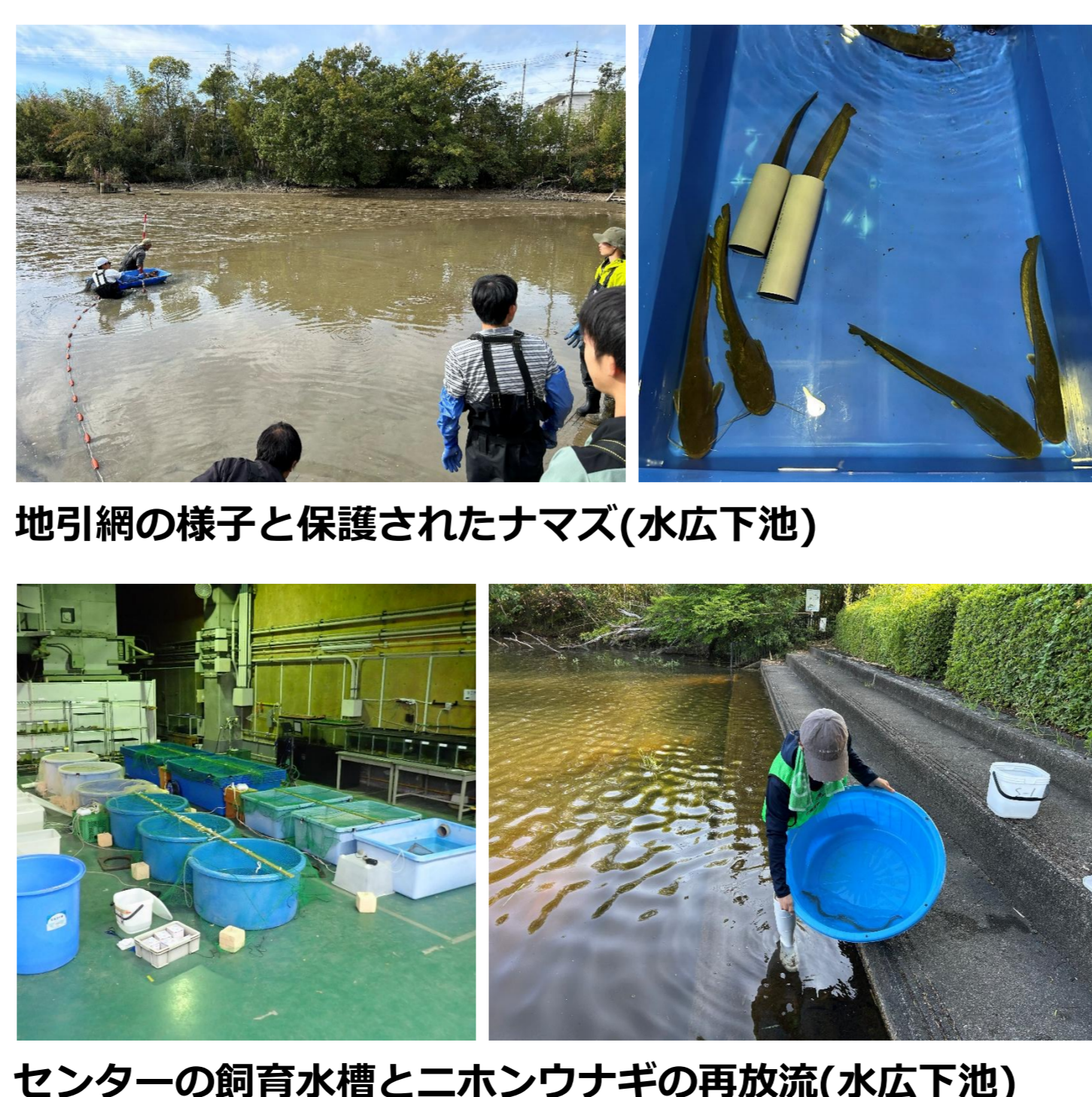
2017～2022年度

- 地元住民や団体から要望を受けて実施する例が増えるも、池に入る人数を限定するなど**方針を転換**
- 主な目的である外来種防除は、水位をより下げるなどの対応により、**コイなどの駆除に成功**
- 一方で、残り残した**アメリカザリガニ**などが**爆発的に増加**する問題も発生



2023～2024年度

- ため池の管理者と調整し、**工事により水位を下げるタイミングで実施**
- 地元の要望により児童の参加が必要な場合でも**最小限の人数を募集**
- 主な目的は**在来種の保護**（同水系への避難・センターでの一時飼育）
- 毎年複数の池で工事を行うため、作業の**人手や資材が不足**
- 他の水系との接続が希薄なため池や、飼育難易度の高い種への対応が困難



各池干しの実施状況

実施日	実施場所	参加者 (見学者含む)	特徴
2011/11/3	天白公園 大根池	600名 (1200名)	なごビオが企画 小中学生290名が参加
2012/11/10	小幡緑地 竜巻池	200名 (450名)	なごビオが企画 小学生80名が参加
2012/12/8	平和公園 猫ヶ洞池	100名	環境改善の一環として 土木事務所の要望で実施
2013/11/17	茶屋ヶ坂公園 茶屋ヶ坂池	110名 (360名)	なごビオが企画 小学生も参加
2014/10/12	中村公園 太閤池	100名 (不明)	環境改善の一環として地域 に協力、小学生40名が参加
2015/10/25	呼続公園 曾池	300名 (不明)	地域の活動に協力 小学生100名が参加
2015/11/7	東ノ池	100名 (不明)	地域の要望で実施
2017/11/26	滝ノ水緑地 滝ノ水北池	80名 (290名)	なごビオが企画 泥上げも併せて実施
2018/10/7	中村公園 ひょうたん池・太閤池	100名 (200名)	環境改善の一環として地域 に協力、小学生も参加
2018/11/25	戸田川緑地 とだがわ生態園	40名 (140名)	環境改善の一環として 管理事務所の要望で実施
2018/12/15	道徳公園 黎明池	200名 (600名)	地域の活動に協力 小学生も参加
2019/12/8	庄内緑地 ガマ池	80名	環境改善の一環として 管理事務所の要望で実施
2020/4/5	熱田神宮 南神池	35名	管理者による水抜きに 併せてなごビオのみで実施
2021/11/14	猪高緑地 すり鉢池	100名 (200名)	地元保全団体の要望で実施 小学生16名が参加
2022/11/19	蛇池公園 蛇池	50名 (300名)	地域の要望を受けて なごビオのみで実施
2023/11/19	隼人池公園 隼人池	100名 (300名)	浚渫工事に併せて実施 小学生36名が参加
2024/1/30 2024/2/29	大池・アメ池	15名	浚渫工事に併せて なごビオのみで実施
2024/3/2 2024/3/9	翠松園緑地 ニツ池	30名	浚渫工事に併せて なごビオのみで実施
2024/11/10	水広公園 水広下池	65名 (100名)	堤体の耐震補強工事に 併せてなごビオのみで実施

今後の課題と展望

- ◆ 工事に伴う一時保護は最終手段的な対応となり、常用することは望ましい状況ではない。そのため、生物多様性に配慮した整備計画や工事手法を検討し用いるよう働きかけていくことが重要である。
- ◆ なごビオでは、ため池が農業利用されていた頃のように水位を変動させることで、**失われたエコトーンの創出**を図る実験を行っている。今後はそのような手法も併用しながら、生物多様性に寄与する池干しを目指していく。